

＜とらえと願い＞

【とらえ】

- ・休み時間に、自分がやろうと決めた水遊びを思う存分やるA君の姿に惹かれ、多くの子が水遊びをやり始めた。
- ・プール開きが延期になったとき、サツマイモの苗を植えようという私の投げかけを、子どもたちは一旦は受け入れた。しかし、畝作りを終えると、持ってきた道具を使ってどうしても水遊びをしたい子たちと、サツマイモの苗を植えたい子たちが話し合いを始めた。畝作りをしながら自分のやりたいことがはっきりしてきたから、話し合いを始めたのだろう。
- ・教師や親に言われたことをそのまま受け入れてしまっていたこの子たちが、やりたいと思ったことを自分でやってみようとし始めているのではないかと私は感じた。

「自分がやりたいと思ったことをやってみよう」という見方が生まれてきている。

【願い】

「自分がやりたいと思ったことをやってみよう」という見方を強め、思う存分にやってほしい。そこには、自分の意志で働きかけていくこの子たちの力強い姿があるはずだ。

＜教材について＞

【素材の魅力・価値】

1 遊び

- ・遊びは、作る、体を動かす、空想の世界に浸る、みんなとやるなど、自分の意志で自分のやりたいことを決めていくことができる。その意志を、遊び道具やルールに反映させることができる。

2 身の回りにあるものを使う

- ・ダンボール、白色トレイ、ペットボトルなど、身の回りにあるものを遊びの材料に使うことで、材料を自由に選んだり、量を確保したり、比較的容易に加工したりすることができる。身の回りにあるものを使って、遊びの材料にしたり、遊び道具を作ったりすることで、より楽しい遊びに発展させていくことができる。

【教材の本質】

楽しく遊ぶためには、材料、遊び道具、ルールの一つ一つに目を向ける必要があること。

『思う存分、遊びたい!』

身の回りにあるもの（ダンボール、白色トレイ、ペットボトルなど）を材料にを使って遊ぶ。

＜教材化に込めた願い＞

身の回りにあるものをどのように使ったら楽しく遊べそうか、実際に試してみる。自分のやりたいことなのかが、楽しく遊ぶことができたかという実感として分かる。

実感したことから、遊びに使う材料や遊び道具、ルールを考えていく。

遊んだときに、楽しいと感じる遊びになる。  
 自分が考えたことによって、楽しく遊べるようになったという手応えを感じる。

手応えを得たことで、もっと楽しく遊べるようにできるのではないかと考える。  
 今やっている遊びでは満足できなくなってきたことを感じて立ち止まる。

【教師の関わり】

「この先、どのようにしていきたいのか、設計図を描こう。」  
 教材の本質で迫ることによって、自分のやりたいことを見つめさせる。

材料、遊び道具、ルールの、どこにどんな手の加え方をしていけばいいのかと吟味することで、自分がこれまでにどんな楽しさを求めてきたのかを見つめる。  
 もっと楽しみたいと思っている自分を感じ、そんな自分に向き合っているのかと自らを問う。

思う存分遊ぶことができるように、材料、遊び道具、ルールを工夫していく。  
 「自分がやりたいと思ったことをやるって、いいな」と感じる。

【実際の追究】

追究前 <身の回りにある、工作などに使えるものをとっておこう。>

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨ <身の回りの材料を使って、遊ぼう。>

○いろいろなしなかけを作りたい。  
・空き箱やペットボトルを使って、ロボットを作ろう。強いロボットにしたいな。

○空想の世界に浸りたい。  
・大きなダンボールの中に入って遊ぶと楽しいな。

○材料の特徴を生かして遊び道具を作りたい。  
・ペットボトルを使って、何か作れそうかな。

・強いロボットにするために、いろいろな装備をつけよう。頭に大きな角をつけるぞ。  
・ロボットに大きな角をつけたら、バランスが悪くなっちゃった。

・ダンボールのバスを作って、みんなを乗せて遊ぼう。  
・小さなダンボールにすっぽり入ると、お風呂みたいで楽しいな。温泉旅館を作って、バスでみんなを招待しよう。

・ペットボトルをのぞいてみると、きらきらしている。ペットボトルを使って万華鏡を作ったらきれいだろうな。今ある材料では足りないから、家からキラキラした紙を持ってこよう。

・ロボットを発進させるための基地を作るぞ。ロボットだけではなくて、戦車も作ろう。  
・ロボットの足の部分をガムテープで頑丈に固定すれば、立つようになるだろう。

・温泉旅館にするためには、お風呂だけではなくて、部屋や、食堂、受付も作ろう。  
・お風呂には、新聞紙をいっぱい入れたら、もっと気持ちよくなそうぞ。

・万華鏡の回りを覆って、中をもっと暗くしよう。そうしたら、もっとキラキラするかもしれない。  
・万華鏡ができたぞ。ペットボトルを使って、もっと他のものが作れないかな。

どんどん作っていききたいな。

⑩ <作るのをやめて、自分の作ったもので遊んでみよう>

・作ったロボットや戦車を戦わせると、迫力があっていいな。でも、ロボットが立たないのがやっぱり気になるんだよな。

・お客さんがいっぱい来てくれて、よかった。でも、もっとたくさんのお客さんに来てもらいたいな。

・万華鏡は完成したと思っていたけれど、中の紙が思ったようにキラキラしないのが気になるな。もっとキラキラさせたい。

おもしろいけれど、何かもの足りない。思い切り遊べていない気がする。

⑪⑫ <これから先、どうしてきたいのか、設計図をかこう。>

・安定させるためには角を短くするしか方法はない。でも、そんなのは嫌だ。大切なのは、バランスではないはず。

・お客さんをたくさん集めたいな。そのために、お客さんを運ぶバスをもっと大きなものにしよう。

・ガムテープをはがして、光を入れてみよう。マジックで色を塗ったら、光の色が変わるかもしれない。

⑬⑭⑮  
・不安定でも、戦ったときに相手を倒せるようなしなかけを作っていこう。戦車も、不安定になるけれどペットボトルを積んで高くして、弾が遠くまで飛ぶようにするぞ。

・たくさんのお客さんに乗せられるように、できるだけ大きなダンボール箱を使ってバスを作ろう。東館のあちこちを回って、たくさん人を集めるぞ。

・光を入れたら、中の紙がキラキラ光るようになった！マジックで色を塗ったら、入ってくる光の色が変わったよ。光を入れることが重要だったんだ。

すっごく楽しい遊びになってきたぞ。やりたいと思ったことをやるって、こんなに楽しいんだ！

【Bさんの追究】

Bさん・毎日材料を家から持ってくる。

①②

Bさん・持ってきたミカン箱ぐらいの大きさのダンボールに、いろいろな材料を次々と取り付けていく。  
Bさん・材料を取り付けるのをやめ、じっと考え込む。

\* Bさんは、集めた材料を使って、どんな遊び道具が作れそうかと考え、次々と材料をダンボールに取り付けていったのではないが。しかし、Bさんは、集めた材料を思いつくままに使ってしまったのいいのかと考えたのだろう。

③④

Bさん・手に持ったペンにプリンカップを逆さにしてかぶせ、ペンでカップをくるくる回す。

⑦

Bさん・材料箱から波状に加工された白い紙を取り出す。それを筒状に巻いて、望遠鏡を見るようにのぞき込む。

⑧⑨

Bさん・赤いネットを頭からかぶり、顔全体を覆う。ネットをかぶったまま友達の方に走っていき、友達をびっくりさせる。  
\* Bさんは、自分が持ってきた材料の中から、材料を一つずつ手にとっては、その材料がどんなふうに使えそうかと試していた。そうすることでBさんは、その材料の透明性や弾力、音や見え方、伸び方などの特徴に触れていったのだと私は考える。

Bさん・お母さんが一緒になって材料を集めてくれていることを話し始める。

⑩ 教師「(材料箱の中身を)全部出してみようか。」

Bさん・一つ一つの材料を取り出し、取り出した材料を箱の横に、そっと置いていく。

\* Bさんは、「お母さんと一緒に集めたどの材料も無駄にしたいくない」という気持ちをもっていた。だからこそ、一つ一つの材料を試して、それぞれの材料の特徴に触れてきた。しかし、材料箱の中身を全て取り出して、見たことで、Bさんは、「遊びに使えそうな材料と、使えなさそうな材料があり、取舍選択していく必要がある」ということに気がついたのだと私は考える。

⑪⑫

Bさん・波状の白い紙を巻き、のぞく。しばらく巻いた紙を見ていたが、思いついたように自分の場所に戻っていった。

Bさん・ペットボトルの回りに白い波状の紙を巻き付け、ペットボトルの口から中をのぞく。万華鏡のようなものを作る。ペットボトルの底の部分に、エアシートをはった団扇を近づけ、中をのぞく。

⑬⑭

Bさん・エアシートをひもに吊り下げ、頭に巻く。  
Bさん「眼鏡だよ。こうやって、変に見えるように。」

\* Bさんは、「この材料のこの特徴を使って、遊び道具を作りたい」という自分の考えをはっきりさせたからこそ、迷うことなく材料を選び、次々とその材料の特徴を生かした道具を作り始めていったのではないかと私は考える。

## 1 Bさんへのとらえと願い

運動会の大玉転がしの練習を行った。Bさんは、順番に並んで練習を行おうと何度も呼びかけた。順番に並ぶことで、自分の位置がはっきりとして、自分がいつ、どこへ出ればいいのか分かりやすくなる。できる限り速くゴールするために、整然と並んで、一つ一つの過程を自分の目で確かめたいのだと私は思った。

生活科の「高く、高く」で、新聞紙を高く積み上げた。Bさんは、新聞紙を二つ折りにして丁寧に折りたたみ、それを重ね続けた。1枚1枚を積み重ねていけば、安定感が得られ、最終的に高くなるはずだと考えていたのだと私は思った。

Bさんは、順番に並べたり、1枚1枚を丁寧に積み重ねていったりするなど、一つ一つの過程を目に見える形で整然とさせていく。Bさんは、一つ一つの過程を整然とさせていくことによって、これから先に自分がどうしていけばいいのかを見通そうとしているのではないだろうか。私は、Bさんには「先を見通したい」という見方があるのだと考え、これからもBさんに「先を見通したい」という見方を発揮し続けてほしいと願った。

本教材は、身の回りのものを材料に使う遊ばせ活動を通して、やりたい遊びをもっと楽しみたいと考える自分自身を見つめ、思う存分遊ぶことができるように、使う材料や遊び道具、ルールを工夫していく教材だ。「先を見通したい」という見方を持っているBさんは、思う存分遊ぶために、遊びに使う材料、遊び道具、ルールのどこをどのように工夫していけばいいのか一つ一つを順番に見ていこう。一つ一つを順番に見ていくことで、思う存分遊べる遊びにしていくことができたとき、Bさんは、一つ一つを順番に見ていくというやり方に自信を深めるだろう。そんなBさんは、これからも、一つ一つの過程を整然とさせることで、先を見通していくBさんであり続けるだろうと私は考えた。

## 2 材料への気付き

本追究を始める前に、私は、各家庭に「身の回りにある工作などに使えそうなものを取っておいてください」と投げかけた。Bさんは、毎日のように、白色トレイやひも、ペットボトルなどいろいろな材料を持ってきた。Bさんの材料箱には、入りきらないほどの、たくさんの材料が集まっていた。

第①②時、「自分が持ってきた材料を使って遊ぼう」と投げかけられたBさんは、家から持ってきたダンボール箱に、梱包用エアシートや牛乳パックをガムテープで貼ったり、白色トレイや卵のパックをひもで吊したりしていった。何を作っているのかと私が尋ねると、Bさんは「適当に。」と答えた。私には、いろいろな材料を、手当たり次第に、雑然と取り付けているだけのように思えた。いろいろな材料をダンボール箱に取り付けると、Bさんは、作ることを止めて、じっと考えこんだ。次の時間になっても、Bさんは、「いい材料がそろわない」と言い、何もすることができなかった。何を作りたいのか聞いても、Bさんは、「まだ、考えられない」と言ったまま、ずっと考えていた。

Bさんは、追究前からたくさんの材料を集めてきた。しかし、その材料を使ってどうやって遊ぶのか、明確な目的があったわけではない。Bさんは、集めたたくさんの材料を前にして、これらの材料をどう使えばいいのか迷ってしまっているのではないかと私は思った。私は、Bさんに、何を作るのか考えるのではなく、ボーリングのように、どんな遊び方をしたいのかを考えるように投げかけた。遊び方を考えることで、その遊び方に必要な材料や遊び道具を考えていくことができるだろうと考えたからだ。

Bさんは、自分が持ってきた材料の中から、材料の一つずつ手にとって、その材料を使ってどんなことができそうかと試し始めた。Bさんが、どのような材料を使って、どのようなことをしたのかは、以下の通りだ。

(ア) エアシートと透明なプラスチックのカップ (第③④時前半、第⑤⑥時)

エアシートを小さく丸めて球を作り、口に入れて噛んだ。しばらくその球をじっと見つめた後、再びそれを口にくわえた。

逆さにした透明なプラスチックのカップにペンを挿し、クルクルと回した。また、エアシートを小さく丸めた球をカップの中に入れると、床に伏せてカップを小刻みに揺すったり、指で前後に弾いたりした。

(イ) ペットボトル (第③④時後半)

ペットボトルの口を切り落として、キャップを中に入れると、ガムテープで口を塞ぎ、振ったり、転がしたりした。そして、中のキャップが転がる様子を見たり、カラカラと鳴る音を聞いたりしていた。

(ウ) 波状に加工された白い紙 (第⑦時)

波状に加工された白い紙をはさみで切った。切るたびに鳴るブツブツという音を聞いていた。また、紙をクルクルと巻いてのぞき、「普通で見るより、これで見の方がきれい」と景色が変化する様子を見ていた。(写真1)

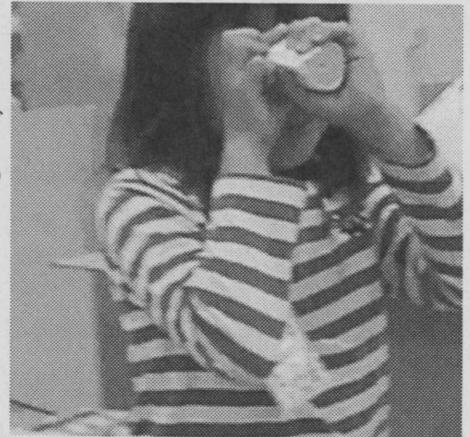


写真1 波状に加工された紙を丸めてのぞく。

(エ) 赤いネット (第⑧⑨時)

みかんなどを入れる赤いネットを、手にはめて眺めたり、頭からネットをかぶって友達や教師を驚かせたりした。また、ネットを折り返して、キノコのようなものを作ったり、手でしごいて真っ直ぐに伸ばし、牛乳パックに巻こうとしたりしていった。

Bさんは、材料を一つずつ手にとっては、その材料を使ってどんな遊び道具を作ることができて、どんなことをして遊べるのかを試すことで、それぞれの材料の持つ、伸び方、見え方、透明性、弾力などの特徴に触れていったのではないかと私は考える。

### 3 材料に対するBさんの気持ち

第⑧⑨時、突然、Bさんが、材料箱の中からひもの入った小箱を取り出して、私に「これ、ひもをためていたら、お母さんがくれた。」と、持ってきた材料について話し始めた。たくさん材料を集めたことを私が褒めると、Bさんは、「このカップはね、親戚の家がくれた。プリンが入っていたの。3つあったから、兄弟3人でお母さんにも一口ずつあげて、お母さんも食べて、それで、洗ってくれた。」など、お母さんが一緒になって材料を集めてくれていることを話し始めた。Bさんにとっては、お母さんが自分と一緒に集めてくれた材料の一つ一つが、大切なものであり、無駄にはしたくないものなのだと、私は考えた。しかし、第⑩時、Bさんは「でも、だめ。こんなにいっぱいあるからさ、どうやったらいいのかわからない」と言った。

Bさんは、本追究が始まってから、「何か、いい材料がそろわない」と言いながらも、教師が準備した材料には見向きもせず、自分が持ってきた材料を一つ一つ手にとってどんなことができそうかを試してきた。お母さんが一緒になって準備してくれた材料だから、どの材料も無駄にはしたくないというBさんの気持ちのあらわれだったのだろう。

第①②時に、Bさんは、持ってきた材料を使って、どんな遊び道具が作れそうかと考えて、材料を次々とダンボール箱に取り付けていった。しかし、Bさんは、できあがった道具を見て、こんなふうには思い

つくままに材料を使ってしまってもよいのかと、ふと、自分が集めた材料の使い方が気になったのではな  
いか。そこには、お母さんが一緒になって集めてくれたどの材料も大事に使いたいというBさんの気持  
ちがあったと私は考える。だからこそ、Bさんは、自分が持ってきた材料の中から、気になる材料を一  
つずつ選んでは、「この材料は、どんなふうに使えそうかな。」と一つ一つ試していったのだろう。

#### 4 教師の関わり

第⑩時、私は、子どもたちに「作るのをやめて、自分の作ったもので遊んでみよう」と投げかけた。  
これまで、子どもたちの多くは、次々と遊び道具を作ってきていた。子どもたちは、作った遊び道具で  
遊んでみても、どこかもの足りないものを感じていたから、次々に新しい遊び道具を作っているのだろ  
うと、私は考えた。そこで、私は、自分が今まで作ってきた遊び道具で遊ぶように投げかけた。今まで  
作ってきた遊び道具で遊んでみることによって、子どもたちが、自分の遊びのどこにももの足りなさを感じ  
ているのか、考えるきっかけになるのではないかと考えたからだ。

Bさんは、第①②時に作った机らしきもの以外に、遊び道具を作っ  
てはいなかった。「作るのをやめて、自分の作ったもので遊んでみよう」  
と投げかけられても、Bさんはどうすることもできなかった。Bさんは、  
それまで、一つ一つの材料がどのように使えそうかを試すことによって、  
それぞれの材料の持つ伸び方、見え方、透明性、弾力などの特徴に触れ  
てきていた。だが、Bさんの材料箱の中には、まだまだたくさんの材料  
があった。そこで、私は、Bさんに、一度全ての材料を材料箱の中から  
出し、材料箱の中味を整頓するように関わった。材料を一つ一つ取り出  
して全ての材料を見ることで、どの材料が遊びに使えそうで、どの材料  
が使えなさそうかを考えるきっかけにしてほしいと考えたからだ。

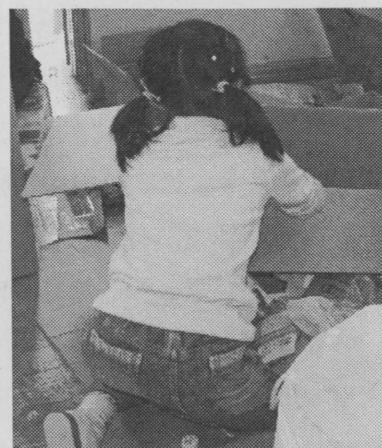


写真2 材料箱の中味を取り出す。

材料箱の中味を整頓するよう投げかけられたBさんは、材料箱の奥にしまいこまれていた材料を一  
つ一つ取り出していった。Bさんは、「この紙袋の中に、まだ、こんなのが入っていた!」「スプーンも  
あった!」などと歓声を上げた。持ってきたけれど今まで一度も触ることなく箱の中にしまっておいた  
材料や、自分が持ってきたことを忘れてしまっていた材料にも改めて触れていった。(写真2)

第⑪⑫時、私は、子どもたちに、設計図を描かせた。作るのをやめて遊んだことで、子どもたちが、  
自分の遊びのどこに物足りなさを感じ、どこをどう工夫していきたいのかを考え始めただろうと考えた  
からだ。しかし、Bさんは、設計図を描くように投げかけられても、何も描くことができなかった。設  
計図を描けそうか私が尋ねても、Bさんは首を横に振るだけだった。Bさんが、どの材料が遊びに使え  
そうか一つ一つの材料を試し、それぞれの材料の特徴に触れてきたにもかかわらず、設計図を描けない  
のは、第③④時に、私が、遊び方を考えた方がよいと投げかけたからで  
はないかと私は考えた。私は、Bさんに作ることを認める投げかけをし  
た。Bさんは、じっと考えていたが、しばらくすると、次々にいろいろ  
な遊び道具を作っていた。Bさんが第⑪⑫時以降に作っていたもの  
は、以下の通りだ。

##### (ア) エアシートを使った眼鏡 (写真3)

色の付いた飾りひもに、梱包用エアシートをつり下げ、額に結んで眼  
鏡を作った。第①②時、ダンボール箱にいろいろな材料を取り付けて  
いったときに、真っ先に使ったのもこのエアシートだった。Bさんは、



写真3 エアシートの特徴を生かして眼鏡を作る。

このシートを、かぶせる、広げて目の前にかざす、丸める、口にくわえて噛むなどしていた。こうして触れてきたエアシートの特徴の中で、のぞいたときの景色の見え方を生かして眼鏡を作ったのだろう。

#### (イ) ペットボトルを使った鉛筆立て

ペットボトルの中に梱包用エアシートを詰め、鉛筆立てを作った。エアシートを口の中に入れて噛むなどして触れてきたエアシートの弾力を生かせば、鉛筆の芯が折れにくくなると考えたのだろう。そして、その鉛筆立てをひっくり返し、鉛筆で鉛筆立てをカラカラと回して遊んだ。Bさんは、第③④時、透明なカップを使って、同じようにペンでカラカラと回している。

#### (ウ) 波状の白い紙を使った万華鏡のようなもの

第⑦時と同じように、波状に加工された白い紙を筒状に巻いて、望遠鏡のようにしてのぞき込んだ。そして、その波状の白い紙をペットボトルの側面に巻き付けると、エアシートを貼った団扇をペットボトルの底面に近づけ、中をのぞき込んだ。ペットボトルの口からのぞいた団扇は、万華鏡のように様々に色や形を変えた。波状に加工された紙をのぞいて見たときに、回りの景色がいつもよりも違って見えたことを生かしたのだろう。

#### (エ) 赤いネットを使った手袋

赤いネットをギザギザに切って両手にはめると、自分の頬をなでたり、ネットをはめた手をしばらく眺めたりしていた。赤いネットは、第⑧⑨時以降、Bさんが、かぶったり、手にはめたり、巻いたりして、くり返し使ってきた材料だ。Bさんは、そうして赤いネットを使って遊ぶことで触れてきた、編み目が広がって伸びるという特徴を生かして、手袋を作ったのではないか。

以上のように、Bさんが第⑪⑫時以降に作った遊び道具には、それまでBさんが試してきた材料が使われていた。それぞれの遊び道具には、それまで触れてきた伸び方、見え方、透明性、弾力など、それぞれの材料の特徴が生かされていた。そこには、「この材料の、この特徴を使って、遊び道具を作りたい」というBさんの意図があると私は思った。

## 5 今後の課題

Bさんが、「自分が持ってきた材料を使って遊びたい」という目的のために、一つ一つの材料の特徴を試し、「この材料の、この特徴を使って、遊び道具を作ろう」とはっきりさせたところに、私は価値を見出したい。しかし、本追究を通して、私がとらえた「先を見通したい」というBさんの見方が表出していたのかについては、言い切ることができない。それは、私が、追究前に作ることを前提にして材料を集めさせたにもかかわらず、第①②時に「どんなことをして遊べそうか」と遊び方そのものを考えるよう投げかけてしまったことによる。その結果、持ってきた材料を使って工作すればいいのか、遊び道具を作ればいいのか、遊びの材料に使えばいいのかと、考えることが多岐にわたってしまい、Bさんを始め、多くの子を迷わせることになってしまった。

本追究を考えるにあたって、私は、思う存分遊びたいという子どもの思いを実現するために、どんな遊びでも行うことができるようにしたいと考えた。しかし、「自分がやりたいと思ったことをやってみよう」という見方が本追究のどの場面にあらわれてくるのか、そして教師は、そのあわれを、子どもの材料の選び方で見えていくのか、作る物で見えていくのか、遊び方で見えていくのかを具体的に考えていなかった。そのために、導入段階から子どもたちを迷わせるような投げかけをしてしまうことになった。教材の本質を絞り、追究で子どもたちに願う姿がどこにどのように出てくるのかをはっきりさせていくことが、今後の大きな課題である。